

「発達障害」という言葉もだいぶ市民権を得てきたのではないのでしょうか。今や大学生の 10%程度は何らかの発達の困難を抱えているとまで言われます。しかし、実際のところ、「発達障害」とは何か、と言われると、なかなか複雑な事情が絡んできます。障害への理解や多様性の受け入れが叫ばれる昨今、「発達障害」について理解を深めることも意義あることでしょう。

どこから「障害」?

「発達障害」とは生まれつきの発達の偏りだ、ということは、なんとなく知られているかと思います。では、どのくらい偏っていたら「障害」なのでしょう。実は、明確な境界線はありません。さらに言えば、偏りが強い人が「発達障害」とも限らないのです。

たとえば、意表を突く質問で人気のインタビュアーや、徹夜で週刊誌の連載をこなすマンガ家などは、空気の読みなさや集中力のメリハリの点でとんでもなく偏っていますが、「障害」があるとは言えません。しかし、どちらの場合も、一般企業の正社員としてはやっていけないかもしれません。

逆に、ほんの少し眠くなりやすいだけなのだけど、それでいつも怒られている人がいるとしたら、「障害」によるものだという理解を共有することで、だいぶ楽になるかもしれません。



「障害」でなくても一人一人違う

つまり、「障害」かどうかは生活に支障があるかどうかなのです。ですから環境が変われば「障害」ではなくなるということもありえます。同様に、環境が変わって「障害」が生まれることもありえます。

「偏っている発達障害の人」と「偏りのないふつうの人」がいるわけではないのです。一人一人がそれぞれ他の人とは違うという話なのです。

「発達障害」だから特別な配慮をするけど、あなたは「障害」ではないのだから、「みんなと同じように」がんばりなさい、というのは、あまり多様性ある社会とは言えなさそうです(「みんな」側にいる人にとっても)。

「発達障害」への理解を足がかりに、自分自身も人とは違うユニークな個であることに気づけるといいですね。

